

## わが青春の譜（一）

山岡浩二郎

### 序にかえて

思えば、私はヤンマーディーゼル株式会社の創始者、山岡孫吉初代社長のもと、孫吉社長の深い信頼に支えられ、戦後の混乱期にヤンマーの生産再開に携わって以来、今日までの半世紀を技術・経営陣の一角を担って、無我夢中で突っ走ってきた。

三十八歳の時にヤンマーと兼任で社長を引き受けた株式会社神崎高級工機製作所も、本年五月で創業五十周年を迎えることになった。

いま齢八十を目前にして、わが生涯をふりかえってみると、やはり最初に頭に浮かぶのは、孫吉社長と共にあつた日々である。人はどうあるべきか、事業とは何か、リーダーシップとは何か、故郷を愛するとはどういうことか、奉仕の心とはどんなことを指すか、それらのことごとくを、私は戦後、海軍から復員して、ヤンマーの事業に参画して以来、孫吉社長から日々の生活、仕事のなかで、ある時は言葉で、ある時は態度でいちいち教えられた。

これらの一つひとつを、今日に当てはめてみると、世代の違い、価値観の変化とは無関係に、ヤンマーでは何か大切なところが、すつぽり抜け落ちていのような気がしてならない。そんなことを考えているうち、ふつと、私は自分なりに果たしてきたささやかな経験であつても、語りよう伝えようによつては、次の時代を背負って立つ若い人々に対して、何か残せるのではないかと思いはじめた。

そこで、過ぎし日にその都度書きとめていた雑文や寄稿文、講演等で語つたものの中から抜粋して手を加え、整理したのがこの拙著である。

年寄りの繰り言と思われるかも知れないが、私にとっては正直な告白であり、稚拙な文でお読みづらいことも多いだろうが、気軽に目を通していただけるなら過分の幸いである。

一九九七年五月

## スポーツに明け暮れて

私は大正七年（一九一八）一月二日、大阪市東区東高津北ノ町七一六番地に、父川崎貞一、母ことの次男として生まれた。今は天王寺区になって地名も消え、あたりの様子もすっかり変わってしまったが、今の高津神社や府立高津高校のある上町台地の一角と思ってもらえればよいだろう。由緒ある神社や寺の多いところで、今でもムクドリや野鳩が飛んでくるところである。父は、東京高等師範学校を出て、中学校で英語の教師をしていたが、その後、小学校の校長を永く務め、家庭環境はなかなか厳しい家柄であった。二歳年上の兄、辰雄、三年のちに妹、美啓子が生まれ、三人兄弟のひとりとして育てられた。



小学校3年の時、家族全員で  
(子供の中央 浩二郎)

入学基準が厳しく、たんに成績の善し悪しだけではなく、家庭の環境や躰まで選考の対象にしていた。

師範学校の構内には大きなグラウンドがあつて、師範学校の生徒たちが元気にサッカーをしていた。ボールを蹴つて構内を駆けまわる姿がいかにも躍動感にあふれており、幼稚園児の頃から私はたちまち好きになり、小学校に入るとやがて朝早く起き、授業の始まる一時間前にはもうグラウンドに立って、懸命にボールを追いかけるようになっていた。

当時、蹴球と呼ばれたサッカーは、明治の初めに日本に伝わった。明治三十年（一八九七）東京高等師範学校でゲームとして正式にとりあげられるから、面白さを知った卒業生が、教師として全国各地の学校に赴任してそれを伝え、急速に広がったといわれる。私が小学校に入学した頃、関西学生リーグや東京カレッジリーグも結成され、ようやく広く日本全土で人々の耳目を集める時期にあつていった。

五歳のとき、

現在の大阪教育  
大学の前身であ  
つた大阪府女子  
師範学校附属幼  
稚園に入園、三  
年保育を終えて、  
大阪府天王寺師  
範学校附属の小  
学校に入学した。  
当時この附属は

今とちがってこの時代の子供たちは、スポーツとまではいわなくても、とにかく毎日外でよく遊んだものだ。私は運動神経に恵まれたこともあって、スポーツは大好きで、なかでも球技を好み、テニス、野球、卓球などいろんなことに手を出した。今から思えば、この頃からすでに、いずれは何かのスポーツ選手になれそうなスポーツスピリットのようなものが兼ね備わっていたようだ。

中学校は大阪府立今宮中学校に入学した。残念なことに戦後の今宮高校は、学区制のせいもあって往時の元気をなくしているようだが、戦前の今宮中学といえば、それこそ北野中学と並ぶ、進学の優秀さを讃えられた名門校であった。古ぼけた木造の校舎で、今宮戎から迷路のような露地を通り抜けると正門があった。

中学校に入るとすぐにサッカー部に勧誘された。ところがサッカー部の部室に行ってみると、煙草の臭いはするし、どうもいまひとつ雰囲気馴染めない。こりや不良の仲間になったらたいへんだという気がして、思い切りよく断わった。そのとき、もしそのまま入部していたら、おそらくサッカー選手にはなつたろうが、せいぜい二流の大学を出て、今ごろ何をしていたかわからなかつたろう。背丈もそんなに高いほうではなく、体格面からはスポーツ選手に適したかどうか多少不安もあつたし、まあ真面目に勉強をしたおかげで、帝大まで行って何とかものになったと思うと、こんなささやかな思い出のひとつもまた不思議な気もする。スポーツ選手としての道は歩まなかつたが、根っからのスポーツ愛好家として、後年、栄光あるヤンマーサッカー部などに貢献できたのも、このときの決断が左右したという気がするからだ。

それでも、中学校では、三年生のときには体操の鉄棒と鞍馬で知事賞をもらつた。のち、ヤンマーサッカー部を創設し、みずから部長兼総監督になつたり、ゴルフもシングルまで上達し、琵琶湖カントリークラブではクラブチャンピオンをもらうまでになつたのも、このころの熱心な鍛練が重なつたものと、ここはひそかに自負しておくことにする。

そういえば私の小・中学生時代の同級生には、中学校でラグビー部をつくつたり、陸上の高飛びでオリンピックピック選手になつたり、サッカーで日本一になつたというような、運動神経に優れた者が多かつた。すばしいというか、ヤンチャというか、そんな連中がそろつていた。おかげで授業中、昼前ともなれば腹はへるし、眠いし、ついこつくりこつくりやって、何度となく先生から頭をコツンとやられたものだった。



小学校時代の恩師 南波義秋先生

後日談になるが、そんな小学校時代の恩師の一人である南波義秋先生が、定年退官後の先年、縁あってヤンマーの山岡育英会事務局にお勤めいただくことになった。懐かしい再会だったが、当時のヤンチャ昭代のことばばらされそうで、何となく照れくさいなど、年甲斐もなく思ったものである。世の中というものはよくいったもので、狭いようで広く、広いようで狭いもの、いろんなことがあるものだ。

### わが青春の序曲 —— 大阪高等学校理科乙類 ——

この今宮中学校時代、私は将来は医者になろうと心に固く決めていた。母親が病弱で、たえず病院通いをくり返し、学校から帰ると留守がちが多くいつも寂しい思いをしたからだ。そんな母のためにも、また将来の自分の家族に同じ寂しさを味わせないためにも、ぜひ医者になって幸福な家庭を築かねば、と子供心に決めていた。その点では、先にスポーツのことがばかりいったけれども、勉強のほうもおろそかにせず必死になって励んだものだった。おかげで念願の大阪高等学校の理科乙類に進学することができた。当時の大阪高等学校がどんな学校だったか、手元に先輩にあたる作家の故秋田實氏の『大高時代』という文章があるので、ちよつと引用させてもらおう。

「思い出すと、懐しい。

私が大高に入学したのは大正十二年、その年の九月に関東大震災のあった年で、まだ私が数えて十八歳、もう今から五十四年の昔になる。

学校の正式の名前は大阪高等学校。はじめて大阪に、東京の三高や京都の三高と同じ高等学校が出来るというので、世間から物珍しがられた。私はその第二期生で、文科乙類、ドイツ語だった。入学する時は、二十四人に一人という大変な競争率だったが、私は幸い席次は十二番だった。入る時の成績はわりあいよかったが、入ってからには代表的な怠け者の生徒で、皆が三年で卒業するところ、私は二年余計にいて、五年かかった。」

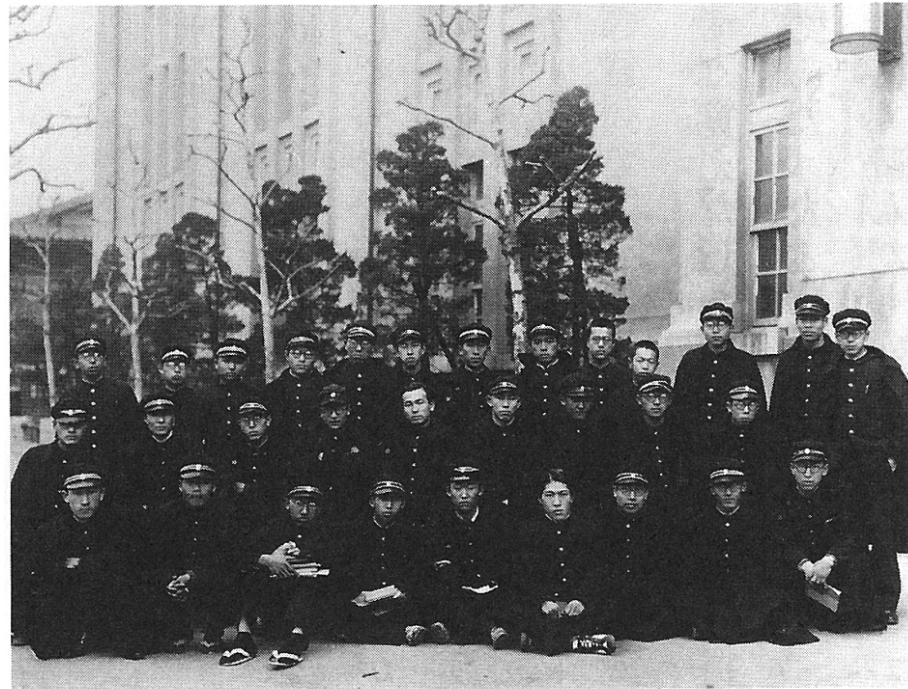
先輩の方はよくご存知だと思いが、当時の高等学校は文科・理科ともに外国語を英語とする甲類、ドイツ語の乙類、フランス語の丙類に分かれていた。なかでも理科乙類は医者を目指す者の関門で、合格は最難関とされ、合格者は三十人、その大半が医者の子弟だった。

大正十一年（一九二二）

開校。浪速っ子の衆望を担った学校で、阿倍野橋から電車で十分余り、大阪南部の北畠にあった。校舎だけがポツンと、東は生駒山まで遮るものが何ひとつない田畑の中にあつた。あたりはのち、この大高を中心に発展していった。高等学校にはサッカー部はなく、私はラグビー部とテニス部に籍を置いた。ラグビー部は、今はもう亡くなられたが、天理教の若野法主が先輩でキャプテンをしておられ、厳しく激しい練習に黙々と取り組んだ。

そのころ、こんなことがあつた。練習中、頃を強く打って脳しんとうを起こしそのまま二日間夢遊病者のようになってしまったのである。それが三日目にパツと、それこそ憑きが落ちたように正気にもどつたのである。寮生活をしていたのを幸い、母親には心配かけまいとしてついに黙つたまままで押し通してしまつたが、大事にいたらなくてよかつたものの、友人たちには心配をかけるし、冷汗ものであつた。

クラブ活動とは別に、一年生は全寮制で全員寮生活を義務づけられていたために、たくさんの友人もできた。その一人に、のち医学界での功績いちじるしく、文化勲章・勲一等瑞宝章を受章され、ノーベル賞の候補にまでなつた早石修君がいる。かつてはドイツの各大学で客員教授を務められ、京都でも多くの教授を育てられ、大阪医科大学の学長を経て、現在は大阪バイオサイエンス研究所の所長として、バイオテクノロジー研究の分野で、



大阪高等学校理科乙類同期生31名(中央左から5人目 山岡浩二郎)

つによく遊んだものであった。ミニミにくり出しては騒ぎたてた。すき焼き屋の「いろは」や寿司屋の「寿司すて」に行つて氣勢をあげるのは日常茶飯事で、とりわけ学芸祭が終わつたあとなどは、マントを羽織り、白い鼻緒の大きな高下駄をはいて道頓堀あたりを徘徊、酒の勢いも借りて、アサヒビールの看板などをはずしたりわるさもずいぶんしたものだつた。

当時の高等学校生徒といえ、ば、「いずれは学士さん」ということで、世間からも一目置かれ、よくもてたもので、だれひとり叱る者もいなかった。いくなれば特権階級であつた。私たちのほうにもかなりの甘えもあつただろうが、今となつてみれば、どれも楽しい青春の思い出として、昨日のことのように思ひ出す。



白い鼻緒の高下駄が懐しい



早石 修君の叙勲受章祝賀会にて(同君夫妻と)

今日なお多大の貢献をされている人である。今でも親友として親しくつき合っていたら、試験が、同君は頭脳明晰で、試験前夜、徹夜で卓球に興じながら、優秀な成績でゆうゆうと合格してしまふというところがあつた。私は一夜漬けながら、必死になつて勉強して試験に臨んだものである。

秋田実氏も、先の文のなかで、入学してすぐ覚えだしたのは、玉突き、将棋、トランプ、花札、麻雀、煙草、酒、何でもだつたと書いておられるが、私なども勉強もよくしたと思う反面、じ

さて、このあたりで、多少は生真面目な告白もおかねばなるまい。当時、ヤンマーディーゼルの創業者である故山岡孫吉初代社長の長男で、これも今は故人となった二代目康人社長にも、少年時代には失敗があった。といって、今の時代ならばそう咎め立てされることもないだろうが、甲南中学に在籍していたとき、ダンスに興ずるなどかなり派手に立ちまわったものだから、学校側から非行として問責され放校処分に見せられてしまったのである。先にも述べたとおり、私の父は教育者であったから、人伝てにこのことを聞き、孫吉社長から相談を受けることになった。

「あなたのところの浩二郎君は性格も座つてよく勉強もするようだから、ぜひ、あなたの家に預かってくれないか」

そんな次第で康人さんと寝食を共にするようになり、年も康人さんが二つ上でしかなかったため、以後兄弟のよう交わることになった。

私自身の将来を決定した山岡家との関係はこんなように始まった。当然のことながら、康人さんの母親である孫吉社長夫人や妹の規志子ともよく往き来するようになり、学校の記念祭などには、康人さんや規志子を誘うこともあった。そして、それがきっかけで、私と規志子はしだいに好き合うようになり、やがて、二人の仲を知った社長夫妻から、「学校を卒業したら、ぜひヤンマーに来てほしい」と懇請されることになったのである。孫吉社長と私の父とのあいだにも互いに深く信頼するところがあり、そんな父の勧めもあって、私は医者になることを断念、工学系に切り換えると、大阪高等学校卒業と同時に大阪帝国大学（今日の大阪大学）の工学部機械工学科に進学、将来に備え、主として内燃機関にかかわる基礎研究に励むようになったのである。

（つづく）



大阪帝大3年の時、研究室前で友人の杉本信夫君(左)と



大阪帝大昭和16年(後)機械工学科同期生による卒業50年記念同窓会  
(前列左から3人目 山岡浩二郎)